

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	夏から秋へ : 文苑
Author(s)	中村, 重喜
Citation	龍南會雜誌, 147: 42-54
Issue date	1912-11-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6394
Right	

日は、たゞ吾々の努力の裡に、その最適の肥料を見出すのである。努力よ、汝は眞理の路を開く唯一のビオニエルである。最後に吾々は再びスキートなトーンに富んだ一の斷案を高唱して筆を擱く。

Das Leben ist eine Reihe von Gärung.

(一一〇、八)

夏　　から　　秋　　へ

重

たとへば、一角獣の瞳のやうな、南光星の光りが、エルサレムの街を追はれた贖罪羊のやうに、トボトボと辿りゆく隊商の群れを淋しう照しいたす、あのアラビアの砂漠を偲ばせて、縣廳の前の大街道は焦茶色の月影に、盛んに砂煙りをあぐるのであつた。廣告隊でも練りゆくんだらうか。トラムベツトやクラリオネツトの發狂した様な、あの未來派のオートケストラでも聞くやうなワイルドな旋律は、紺緑の色に濃き紫を湛へて更けゆく夏の夜の空氣を動搖めかして、窓框の塵に微かな波動を傳ふるのであつた。

私は圖書館の窓に白痴のやうに悄然と凭つてゐた。眼に泌む様な二號活字の強い刺戟に現るゝ、九重の御空の御惱みには、破れ果てた胸にも、新しい悲しみか、冷油の様に湧いて、思へば悚然とするプレデスチーイシヤンの閃めきは、枝垂れ柳の葉蔭に激むアーク燈の紫の陰影に躍つてその黒い牙を見するのであつた。あの朝である。いつもならば、明け易い短か夜を名残るバナナの様な甘い朝星の影が、古鏡の色に深う沈む朝顔の、花の露にも宿るであらうものを、是れは亦、染色の雲隈もなく立ち罩めて、小雨の音がバラバラ

と、明けたやら明けぬやら、荒れ野の花も面を伏せ、磯邊の波も忍び泣く——諒闇の日影とはなつた。

現にもあらで、彷徨ひ出る夢遊病者の様に、はたまた信仰の光りに憧れて西へ東へと、振り鳴らす鈴の音に流れゆく廻國者の様に、私はソコソコと朝食の箸を捨て、宿をのがれ出た。

どうせ日は西に回り、墨の様に私が影はダラダラと淋しう砂利道を東へ流れた。が『喘きゆく街』の放浪者は、今日はまた、蟪蛄よりも厭な市人の群れに立ち交じつて尙、家と思はなかつたのである。

小鳥のやうな少年の心を、遠くへ遠くへと誘ひゆく、あの國境の山々の連亘は、沈みゆく夕日が燃え残す一抹の餘曠に、樺色の匂ひ淡ふ染まつてゐたが、淺黄色の大空は水のやうに澄んで、はや二ツ三ツと星の光りがきらめいてゐた。大路には、はや灯がはゐつて、店々の、花も日影に咽び入る南國を思はする様な水々しい菓物にも、白雨の痕のやうな打水の潦にも、その叩くやうな灯影を映してゐた。

私は、久しぶりに、某先生の私宅を訪れた。暗い玄關に『物乞』のやうに佇んだ私が姿は淋しかつたらう。が沈み入る夕暗に白う浮び出た先生の面に恐ろしい豫感の黒い影は、さらぬだに淋しい私の胸に迫つた。

數日前に一番小さな御方がなくなられたとやら。……項に流す黒髪うなぎの、残る恨みも長からう、雨にハラハラと亂れゆく紫陽花あざさひの、夕べの影に身をまかせ、束の間の春秋を、此の世を偲ぶ名残りとは、どうせかりそめの世のならひとは云へ……。

更に數日、又某先生の御愛子の訃に接した。しめやかに下すさみだが暗い空から黒い土へ、明けても暮れても嘘啼くあの頃であつた。雲をみだるゝ黒髪に半ば埋るゝ白い面に、こととはに盡きせぬかなしみを淋し

う笑んだ御母様が、銀河の波にひるがへす長袖のかけに憧れて逝く忘れがたみの面影が、迫る今宵を傷ましく、私はひとり思ひ入るのであつた。

地上のものは皆ほろびゆくとかや、而も最も美しいものが最も早く……あの暗う聳いたつ鐵壁を、爪が裂けて、紅の血がポトポトと指頭に滴るまで掻きむしつて、泣き崩れても一度び奪ひ去られたタンダデールは二度とエグレースの腕に縋ることはありません。

『惡魔！ 惡魔！ 吾れ汝を呪ふ』、

エグレースは神を呪ひました。

私は日に日に暗い想ひに耽りゆくので。

やがてさる所で、獨乙の講習會が開かれた。私は何も人一倍南蠻鴉舌を覺度い野心もなかつたが、あの薩摩訛りをきくやうなアクセントにかほる『異邦の香』もなつかしく、久しう逢はなかつた友達に逢ふも嬉しいし、で私ははてる額を夏草の深きに沈め、ミルクの様に流れた白雲を、是はまた、バラバラと吹きみだす高い風の音に耳を澄す身とはなつたか、なづかしいとて、いつくしみし淡き花の匂ひも、咽ぶやうな草の香りも、どうせ、昔を偲ふ傷愁のよすがとならうとは。

世界最初のデカダンチストとして詩作と暴飲と放浪とに類れ終つたあのボーと云ふ男が、自分の暗い影を、それは不思議な、惡魔の歌の様なメロデアにたざらした『大鴉』とか云ふ恐ろしい詩に頭を戦かしたある夜の

朝である。どうも氣分がわるくない。一時間だけ講議をきいて家へ歸つたなり倒れた。何やら恐ろしい夢から微かな呻吟うめぎと共に覺めるとビツシヨリと冷汗をかいて、蒲團にくるまつてゐた。どなりの屋根の上から、キラキラと眼を光らす入道雲が、クワツクワツと火を吐いて、家も樹影も盆石も鶏の夫婦も失神してゐる。やがてなまぬるい息がふるへる。正氣づいたやら、みんな痙攣を起してブルブルと胴震ひした。あゝ私は病氣になつたんだな。

こんな日を南の土人達おぞこたちは、白い泡に裏まるゝ小島の岡に、ギラギラと光る烈日の下に人肉を燻じて、香り高い菓酒の酔に踊り狂つてゐるのかしら。あれ蟬は迫り来る官能の高い潮にあほられて、心ゆくばかり生の歡呼をあげてゐるでないか。

ある夕べである。水色の月影は、ドス黒い緑の間からポロポロと滴つてゐた。私は物思ふ人の様に兀然つくれんと戸に凭よつた。夜露の甘いのに酔うたのか、垣根からは鈴虫の急調せつれうが起る。私は頭をあげた。東の空は、さながら曙の匂ひ来るやうに、ホンノリと染まつて、あれ夜市の躁音さうおんは手にとるやうに聞ゆるでないか。

椰子の樹影に佇んで、故郷の祭の音に追憶の夢を辿るあの女のやうに、はたまた山を隔つるオリトーナの町の、大祝宴いはひを興おこする煙火はなびの影に恐ろしい思ひに耽るあの男の様に、私の胸には男二十歳の思ひ出が傷ましくも湧きかへるのであつた。

虚偽と街氣との裡に、少年の春をムザムザと送つた長い恨みはいつまでも盡きぬ。クリスマス夜の夜を窓によつて、凍でかへる星影に、“Gib mir die Jugend wieder.”と叫んだあの男は一場の夢であつたから結構であ

つた。是は唯、思うても歸らぬ夢である。あゝ最早少年のフレッシュな官能を純なる感觸をを以て、此の自然に對する事は出来ないのか。嘗て十里の廣野、夕日が沈む悲しさに双の袂に泣き伏した、あの甘い涙は最早二度と味ふ事は出来ないのか。浮世の義理にかぶるマスクはど厭なものはない。沈み入る日は扇ぎかへすとも肉に喰ひ入つた『成人』のマスクは最早ぬぐすべはない。童貞の惱みを抱いて、自らふきならず横笛の微急調に泣き沈んだあの頃は来る可き豫期のために足並も輕う歩いた樂しさよ。理想とか夢とか、どうせ逢はれぬ漸近線のはかなさか、平行線の盡きぬ思ひと悟つた今の淋しさである。祭の騒ぎは益々聞ゆる。友よ。私は悲しいのである。あの歌を高ううたつてくれ。あのやさしい詩人の思ひよ慰されて私も快よく月を仰ぐであらうよ。

To seek thee did I often rove

Through woods and on the green;

And thou wert still a hope, a love;

Still longed for, never seen!

And I can listen to thee yet;

Can lie upon the plain

And listen, till I do begot

That golden time again.

私等のサークルの内、よくロマンスのシインとなつた加藤社の、一重櫻がハラハラと、雪の素足に後れ毛嚙んだ艶な女と思はする御神燈の影に散りみだるゝ頃、一人の私の友は、ただ一本の葉書を残したぎりで、『上海』とか云ふ虎伏す異國の新開町に去つて仕舞つた。その友がそれは突如として、一人の異國の少年を伴うて避暑に歸つて來た。

その頃は、私は幸に病もやうやう愈つて、偶には Narcosis のやうな病みはふけた頬を嬌艶な祭禮の灯影に濡す宵もあつたので、一葉の書に接するや否や直ちに、立町の宿に訪れた。

異郷の空の彷徨に、寔れた友は、十二歳とか云ふ白面金髮の一少年を紹介した。

『アーネストさん』

異國の少年は青い伶俐な瞳を輝かして笑つた。友には、はすせぬ用事が起つたとて、階下したに降つた。丁度其の夜は市があつたので、宿の格子障子には幻燈のやうに裸火の影が搖れ、アセチリンや石油の燐る香ひが體ぶやうに迫る。競り賣の氣が狂つたやうな懸聲と雜然たる騷音に傷ましげにアーネストさんは面を沈めた。そうして私がいやな低音で、破格ブロックを持ち出すまでもなく、可成り日本語をあやつつた。數奇なる半生の經歷と世にも悲劇的な性格を抱いて、かゝる異國の友を伴れて、遊びあるく吾友を思へば、あの年少詩人 Lam-band をつれて歐洲を街から街へと流れあるいた Verlaine やゐてはあの近頃譯せられた 'The Profundis' と思ひだす Wilde などかアイロニカルに腦裡に浮ぶ。それはとも角も、見知らぬ宿の暗いランプの影で、始めて會つ

た邪宗の少年と相座する運命の奇しきに吾ながら驚れる。

霧深い夜を小蒸汽の甲板デッキに一匹の小猿と相對して“Wir sind alle Kinder einer Mutter”と云つて英吉利海峡を渡つた北歐の大詩人を偲びつゝ何となく異國の少年がなつかしく思はれた。

此處に一つの挿話エピソードを語る事を許されたい。

私はこの友と丁度去年の今頃、薩摩路の果の果なる櫻島の有村とか云ふ海村に暮した事がある。

思へばある宵である。海門嶽の雄姿も一抹の刷毛はけに消れて、星影はさながら降る様に輝いてゐた。黝んだ沖には濕を帶んだ漁り火の影が朧ろに流れ濱波の音は子守唄ララバイの様に睡げに聞ゆる。

『圭さんけいさん』はいつもの様に遊びに來てゐる。暗い岐阜提灯の影に寢をべつて、長い旅を思はしめるやうな高いアクセントダイアレクトの土言に慣れた私達に、あの若い心を憑よるやうな都言葉トウゴを聞かしてくれた。

『圭さんあまり晩くまで御邪魔してはいけませんよ』

筋向への圭さんの御座敷からの御聲でのる。圭さんは頭を擡げ、輝く瞳を斜めに暗い天井の一方に凝らした。遠い聲でも追ふ様に耳を澄して……………頬、口元……………眼つき……………緊張した氣分が柔い優しい少年のライオンに現れた。やがて顔の緊張がさつと破れて、輪廓はバラバラと放散する。……………眼元は媚びるやうに、否夢いつこりむる様に嫣然と……………少年十三の春の笑が、天をも憚らず、地をも恐れず、さながら花のひらくやうに……………笑つた。天地はホツと一息吐いた。

低い袖垣にまつはる夕顔の葉にザワザワと風が渡る。灯影がチラチラとゆれる。

『喰べませんか』と友はバナナの房を鴨居から卸して、其の一つをむき始めた。

云ひ知られぬ運命でも秘めたやうな實の中から赫々と照る日影にこぼれ散る日向葵ひまわりの花粉の噓ひせふ様な香
いが漂ふ。

圭さん。貴方と別れしてからはや一年になりますね。當時、紺青の波に、終日、水鳥のやうに濡れた私は
今や乾いた眼をして熊本のまちを歩るいてゐます。僅か十日ばかり思はぬ異郷に御目にかかつた事も、平穩
なる生を送りゆく私には尙忘れられないエピソードですよ。無邪氣な口付で小賢こがしい事を語る貴方を聞くと
きは、私は自分の過去を最もアイロニカルに見せつけられる氣持がしました。今年の夏は何處で暮しました。
また會ふ夏もありますか。ただ明るい思想を築ゐて花のやうな生涯を送つて下さい。決して青う湧きか
へる峽江フィヨルドに流るゝ夕焼に淋しう見入る少年アルネのやうになつてはゐけませんよ。今私は貴方を思ひ浮べて
フアストの獻詞ツァイトンクの一句を淋しう口ずさみます。

Ihr bringt mit euch die Bilder froher Tage,

Und manche liebe Schatten steigen auf.

Gleich einer alten, halbenklungenen Sage,

Kommt erst Lieb' und Freundschaft mit herauf.

Goethe——

丁度此頃であつた。元氣の好い私の友達の方ちやま達は、始めてオールを推した嬉しさに、書圖湖から住吉まで下つて、旅の憂さ苦さなめたとやらなみぬどやら、後でいろんな面白いアチクドートが高い聲で語るゝのであつた。あゝ、Monetのブラシを思はするやうな強烈なけばけばしい色彩が、ギラギラと輝く八月の外光の中に描き出す吾が友よ。薄月の影にぬれて、ひとり壺井河畔の夕やみに立ちつくす頃は淋しいのである。

あの友はまた異郷に去つて仕舞つた。私はあの友を少し語らうか。いづぞやは雨と灯影に美しい京洛の某中學にボートのチャンとして鳴らしてゐた事もあるそう。よく伏見からボートを宇治川に流して洋々たる琵琶湖にくだる。それはある春の暮れつかた、某校とレースがあつた。そうしてまあ首尾よく勝つたそう。グオロンの絃のやうに緊張した若い幾百の方ちやん達は夢と烟る晩春の波をふるはして如何に高い高い歡呼の聲をあげたんだらう。花とかすみに曇る朧の空は溶けて絹糸のやうな雨となつた。そうしてその夜水に臨む某樓の大廣間に小さな勇士達の祝捷の宴が開かれた。前髪すべる黄楊の小櫛に目も呉れで、やつ口艶な雛妓らが、流るる袖を重しと倦んじて欄に凭るやうな遣瀾ない春の夜を、灯影は如何になまめかしう雨にかがやいたであらう。盃にあふるる狂ひの水にあふられて、さらぬだに湧き立つ若い血潮は如何にアブノルマルな波をあげたんだらう。千代までもと願うた春の夜もふけて、屋を揺かす狂歡の叫びも収まつた。風も冷々軒の玉水音もしめやかに、……あゝ、殘燈の影に酔ひ伏して、甘い鰯魚寢の夢を、御母様の乳でも吸ふ様にどあくまでも貪る坊ちやまよ。貴方達は醒めて儂なしホカホカとする亭午の日影に立つ頃は嚴なる校規に間は

るべき人であつたのか。かくて吾が友は忘る可からざるロマンスの名残りに一葉の寫し繪を抱いて、花が咲くなる京をすて旅路を西へ放浪者の群れにまぎつたので。

全埃及の苦惱を一身に引きうけて、アクトレス This がもゆる腫のためには、地獄で神を嘲笑はんと絶叫した禁欲者 Papiatus も、麗人 Myrhina が衣の裾をたさへて幾年苦行の洞窟をすて、アレキサンドリアの歡樂の街へと願つた聖者 Honorius も覺めても覺めぬ夢ゆゑであらうものを、これはまた凡夫二十歳の淺ましさに、うらぶれの想ひいだいて筑紫の波路を、虎も伏すなる異國のまちへ渡りゆく流離のなごに一掬人生の涙がなくてすまうか。夕日がアカアカと濁つた揚子江の水に映る、チャルメラの聲が泣くやうに街の方へ聞えるとき、楊柳の蔭に空を仰いで懷郷にくづれ落つ胸をひたどかい抱く東の國の若いバガボンドよ。……

秋が來た。うら寒い夕風に、白い齒をみせて淋しう笑ふボプラの葉にも、時代の呪ひをうけて、ヘルの下へも沁み入るやうに叫びながら街から街へ追はれゆく輕鐵の赤いランプにも、はては自分の罪でも塗りかくす様に、いろいろな繪具をベタベタと染むる若い看板畫師の疲れた腫にも——秋が來たのである。蒸すやうな暑さにうめいてゐた熊本の人達は、町角のビラ翻す涼風にソツとよみがへりの眉をあげたが、夕べ夕べ、西の空にあらはるゝ灰色の雲に再び物思ひに入つた。

物思ふ街の路地や陋巷を、若い遍路者は日に日に放浪をつづけたのである。カフェからカフェへと巴里の夜を、歡樂に疲れて流れゆくボードレールを偲びながら。

それはある夕べ、いつものやうに西の空には土^{かはらけいろう}焼色の雲が流れて、今にも暗い風が吹き立ちそうであつた。ある小路の店で買物してゐると、見知らぬ人がツカツカと近よつて、意外な通知^{たより}を私に與へて影のやうに急ぎ去つた。

あゝあの先生は死なれたのか。暗い夕べを青白う泡立つ海^はに陥^はつて……昔の哲學者でゝもあるやうに。私は夢のやうに急ぎかへつた薄暗い窓に凭^よつて心ゆくばかり涙にぬれた。薄ら寒い風が青桐の葉に高う鳴つてゐた。あゝ何と云ふ人生の慌しい姿であらうぞ。

* * * * *

ある朝である。この男は一葉の號外に目を落したなり、あらぬ方に瞳を凝らして失神^{スウェー}にはゐるやうにつき立つた。一世の敬仰の恣にし、世界に向つて純日本の思想を代表した某將軍は、先帝の御跡慕うて夫妻共に刃に伏されたところ。

その夜、雨の音は肅颯として破れ窓に灑ぐ。搖ぐ燭影にそむいて將軍を思ふ。

....., his work is done.

But while the races of mankind endure,

Let his great example stand

Colossal, seen of every land,

And keep the soldier firm, the statesman pure:

Till in all lands and thro' all human story:

The path of duty be the way to glory:

Tennyson, —

友よ。たゞ此の歌を歌はうでないか。そうして物にふるれば必ず鳴る純日本の思想が國難に際して高うあげた高朗のメロデアに和せやうでないか。

*

*

*

*

*

*

かくて長い雨の日が続く。それがカラリと晴れあがると思ひ出したやうに寒がはる。三疊の書屋に迫る青桐の葉に騒ぐ風の音は毎日毎日高うなりまゐりゆく。

ある夕べいつものやうに山の手の街に出る。あゝ秋だなあ。霧がはや低う路上を白う這うて、道ゆく若い人はみんな俯向いてゆく。ときたまそつと腫を上げる。物を恐るやうに。屋根越しに見ゆる空には明日の天気でも思はするやうな暗い雲が流れてゐる、忽ちフツフツと音がして噂に聞いた辻自働車^{タキシンキョウシャ}が馳せすぎた。厭なガソリンの臭ひを残して。私は疲れたやうな運轉手^{エンケンテ}の青い面にチラと見入つた。さうすると淡い感傷と考察とに小さい波をのみたてゝゆくわが日々の生活の淋しさが水のやうに胸に流れた。

Annützig und ruhig wanderst du deine Lebensbahn, ohne Thränen und Lächeln, kaum belebt durch eine gleichgültige Aufmerksamkeit.

Du bist gut und klug……doch alles ist dir fremd——und du bedarfst keines deiner Mitmenschen.

.....

Dein Blick ist tief——aber nicht gedankenvoll; es ist leer in dieser hellen Tiefe.

So wandern bei den erhabenen Klängen gnostischer Melodien in den elysischen Fiebern anmutige Schatten dahin — freudlos und leideos.

Fugenheft.

(大正元年十月二十日夜)

奉悼明治天皇歌並短歌

陶山 喜六

久堅の、天が下には、國はしも、多にあれども、空爾見津、大和の國は、千早蕨、神の御代より、傳はりて、かはらぬ國よ、其國の、神のみするに、あれまして、大御寶を、安らけく、知食しつゝ、日の本の、本つ光を、いちじるく、八洲の外の、海かけて、照しましたる、高光る、日の大御神、安見知、我大君の、草管見、やまひましゝを、四の民、うれへまつりて、鳥羽玉の、夜はすがらに幣帛を、神に平向けて、茜さす、晝はひねもす、玉串を、神に捧げて、かくきはぬ、赤き心に敷妙の、家をも身をも、白波の、かへりみなくて、墨繩の、たいひとすちに、神等に、祈りまつれど、靈幸、神のみめしか、掛卷も、畏かれども、生月の、其甲斐もなく、神隨、神去りましつ、天の原、岩戸を開き、神あがり、あがりいましつ、いかにせむ、如何にせましど、日刺方の、天をば仰ぎ、荒金の、地に平伏し、鹿自物、這廻らひ、射部人の、伏轉輒て、岩根も、裂けよと號叫び、綿津見も、あせよとばかり、慟哭きつゝ、黒自も知らに、くれまどふ、現の闇の、天が下、ぬれ伏す四方の、み民草、また差し出でし、み光の、影をかしこみ、宣りませる、御詔尊み、ひるまなき、袂をしぼり、つくよなき、かなしびしぬび、群肝の、心の限り、うつしみの、からだのきはみ、天皇に、極